

絵図を読む

平成31年1月13日(日) 10:00~11:30

元別子銅山文化遺産課長坪井利一郎

1. はじめに

別子銅山の絵図を何枚か見るが、絵図の中に書かれている筆文字が読めないので眺めるだけに終わっている。施設名がどのように書かれているか活字で表記すると、自然と絵図の中に入っていきから不思議である。情報言語が習得されていないと情報内容が理解できない。住友商事の旧別子・銅山峰研修の案内をして9年目となり、既に63回は案内している。昭和47年に伊藤玉男さんの案内で登って以来、通算でもゆうに100回は越して登っている。明治期の地形図に江戸時代の絵図を併用して案内しているので、絵図が机上でも現地と照合する。

明治時代の写真に何が写っているかも読んだが、今回は更に時間を遡って江戸時代の絵図に何が描かれているかを読んでみる。なお、絵図の筆文字は赤色で活字にしている。位置が分かるようにと補足の地名は水色で示している。

2. 絵図

今回読み解く絵図は次の4点である。

- 資料1 別子立川両御銅山図 A-明和6年(1769)
- 資料2 別子立川両御銅山図 B-明和6年(1769)
- 資料3 別子山内図 一天保10年(1839)墨癡筆
- 資料4 別子御銅山絵図 一天保11年(1840)

3. 絵図の特徴

絵図は、地図と違って測量したものでなくスケッチしたものである。位置関係は分かるが距離は不明である。四角の紙面に描き込むので周囲の山は、四方に倒れる。鳥の目の要領で見る。稜線などは視点を変えているので、かなりデフォルメして合わせている。山内の施設等の表記も絵師がかなり主観的にデフォルメしているので、地図と照合する場合は、読み取りが必要である。絵師がどんな意図で描いているかを見て修正していかないと現地に合わない。

一方地図は、前記したように測量した物なので、方位、距離が正確である。更に平面であるが立体の地表を表現しているので、等高線で高低も判読できる。昔は平板測量をしていたので等高線にスケッチの要素もあり、尾根線は丸く、谷線は楔にと一種の表記方法があった。しかし、現在は写真測量なので、等高線は現状そのままをリアルに表現している。

4. 絵図から何が分かるか

別子立川両御銅山図 A 資料1

1. 嶺北の立川銅山側を見ると「舗役所跡」「勘庭跡」「炭蔵並床屋跡」とある。宝暦12年(1762)閏4月から立川銅山が名実ともに住友の稼業に移り、経営上の事務や製錬などすべてが別子銅山側に帰一する。
2. 立川銅山側に「立川御銅山御遠見場所」がある。明和6年(1769)3月晦日に勘定奉行・長崎奉行兼役の石谷清昌の命で、支配御勘定役の水谷祖右衛門・御普請役の和田清輔が松山藩上知の御料所の検分を兼ねて別子銅山に来山している。先ず「立川銅山跡方御遠見」を終えてから別子へ移っている。本図はその時に調整されたと考えられる。
3. 二の森と三の森の鞍部の手前に御番所があり、立川銅山の入口に当たると考えられる。立川銅山道は、二の森と三の森の鞍部を通過していた。
4. 馬の背の番人小屋が別子銅山の表門に当たる。現在の登山道名の馬の瀬コースである。
5. 入口番小屋が銅山越えの箇所となる。
6. 舗役所は歎喜間符と歎東間符の箇所にある。
7. 山神宮大山積神社が縁起の端に鎮座している。山神宮の西斜面と寛政谷の斜面に焼窯が並んでいる。木場が2ヶ所あり、木材が積まれている。
8. 焼窯の下段に吹所が集まっている。よく見ると左岸が鉛吹炉で右岸が真吹炉の配置である。露頭線沿いの坑口から出された鉱石が縁起の端の焼窯へ降ろされ、焼鉱が鉛吹きされ、対岸に回されて真吹きされて粗銅となり、勘場に集められて、仲持道から新居浜浦に運び出される導線が分かる。
9. 奥窯谷の箇所に裏門がある。
10. 勘場と吹所には柵が設置されている。
11. 勘場の下に制札場がある。
12. 別子は「勘場」、立川は「勘庭」の表記となっている。
13. 集落は下財小屋で統一された表記であるが、鍛冶屋谷のみ、鍛冶小屋と別表記である。
14. 立川銅山に都間符、大黒間符、太平間符、寛永間符があり、別子銅山に大和間符、中西間符、床屋間符、歎喜間符、歎東間符、自在間符、天満間符がある。
15. 東延の3間符は東山間符である。
16. 山様が克明に描かれている。

※制札 禁止事項や布告などを書き記して道端などに建てる札。

別子立川両御銅山図 B 資料2

1. 嶺北の立川銅山側を見ると「鋪役所跡」「勘庭跡」「炭蔵並床屋跡」「立川御銅山御遠見場所」がある。明和6年(1769)3月晦日に勘定奉行・長崎奉行兼役の石谷清昌の命で、支配御勘定役の水谷祖右衛門・御普請役の和田清輔が松山藩上知の御料所の検分を兼ねて別子銅山に来山している。本図はその時に説明用として調整されたと考えられる。
2. 立川銅山にも山神宮があり、二の森と三の森の鞍部に続く立川道が描かれている。
3. 銅山越えの箇所が峯入口となっている。別子銅山の足谷山への入口である。馬の瀬の山道は圏外となっていくのでしっかりとは描かれていない。
4. 鋪役所は歓喜間符と歓東間符の箇所にある。
5. 山神宮大山積神社が縁起の端に鎮座している。山神宮の西斜面と寛政谷の斜面に焼窯が並んでいる。木場が2ヶ所あり、木材が積まれていて下の木場に焼木と表示されている。
6. 焼窯の下段に吹所が集まっている。右岸が間吹床で左岸が鉋床。炭蔵も隣接して柵の内にある。
7. 奥窯谷の箇所に裏門がある。
8. 勘場と吹所には柵が設置されている。
9. 勘場の下に制札場は表示されていない。
10. 別子は「勘場」、立川は「勘庭」の表記となっている。
11. 鍛冶屋の件数が表示されている。毎日の採鉱作業で摩耗する鑿に焼入れをするので、各所に鍛冶屋が分散している。軒数が表記されている。
12. 明和6年5月に別子銅山に風水害があった。「炭蔵流失場所」「下財小家流失場所」「焼窯流失場所」が書かれている。
13. 集落は下財小家で統一された表記である。
14. 住居に比べて生産施設が克明に描かれている。
15. 立川銅山に都間符、大黒間符、太平間符、寛永間符があり、別子銅山に床屋間符、歓喜間符、歓東間符、自在間符、天満間符がある。

別子山内図 資料3

1. 別子銅山の山内が克明に描かれている。
2. 見花谷と両見谷の境あたりから東山の方を魚眼レンズで見ているように単方向で描いている。
3. 現在の日浦登山口に向かう山道は藤原道と表記され、旧別子山村の東側の旧富郷村の「藤原」へ至ることを示している。途中で筏津、南光院、板小屋地藏堂(現在の圓通寺出張所跡)を經由する。
4. 縁起の端には大山積社が鎮座している。大鳥居が描かれている。両見谷と見花谷の間に天満宮がある。制札場前に龍王と地藏のお堂があり、吹所の上に稲荷、東延に山神宮、縁起の端の鞍部に祇園、現在の大切坑あたりに金毘羅宮がある。
5. 土鉾捨場下の「ハカノハナ」は、元禄7年の大火で殉職した杉本七助らを葬った蘭塔場なのだろうか。
6. 舗方内の間符2ヶ所は、歓喜間符と歓東間符である。舗方の下に下金場があり、そこから貧鉦・素石が捨てられている。
7. 東延は東袁の表記である。舗方の間符口2ヶ所以外は東延の間符口だけである。
8. 勘場の大階段に屋根付きの表門がある。勘場の表門の階段両側には、医家と山巡役宅が配置している。勘場の裏手には神輿蔵がある。勘場の南で見花谷の上に立派なウラモンがある。
9. 勘場表門から制札場を通り歓喜間符前を經由して仲持本道が銅山越えに伸びている。また、勘場下の銅蔵を中心に六家御役宅が並び、足谷川沿いに大通りが吹所下流の裏門へ通っている。
(六家御役宅とは、お上の役人宅で、3軒ずつで上番所、下番所にそれぞれ一人が出る。上番所は日々出来る銅の計量に立ち合い、下番所は帳面を付けるのに立ち合う。)
※役宅=役職のために設けられた住宅
10. 裏門の上流の両岸が吹所(下の床屋)である。坑道から搬出された鉦石が下されて焼窯で焼かれ、焼鉦が吹所に下され製錬される。重力に従って上から下に流れる動線の生産都市の構造となっている。
11. 圓通寺が、明治以降に足谷小学校、別子病院、自彊舎が設置される箇所にある。
12. 縁起の端の西斜面、寛政谷斜面、高橋への斜面に焼窯が並んでいて。木場が2ヶ所ある。焼窯の下段に吹所がある。
13. 見花谷の上流の水口が勘場の飲料水の取り口のようである。
14. 縁起は「延木」、東延は「東袁」と同音漢字で表記している。
15. 銅山越えには、積雪期の道標の棹が立てられている。峰地藏、山番所がある。
16. 道には何箇所か夜燈が設置されている。
17. 東延の素麵滝が描かれている。
18. 道や勘場や吹所には詳細に人が描かれている。

別子御銅山絵図 資料 4

1. 別子銅山の山内が描かれている。
2. 題字の傍らの「子ノ三月改」、題字下の「服部氏」から天保11年(1840)の作製と考えられる。服部氏は天保2年から同8年まで別子銅山支配人を勤めた服部平右衛門と思われる。天保11年は別子開坑150年に当たり、当主住友家9代友聞の子万太郎が5月に別子に来ているので、その時の参考にと作製されたと考えられる。
3. 絵図内に5ヶ所、水についての説明文の用紙が貼られている。(次項参照)
4. 現在の日浦登山口への山道は弟地路と表記されている。
5. 歓喜間符、歓東間符のある舗方役所から銅山越えの山道は表門路と表記されている。絵図には描かれていないが、嶺北の馬の背の山番所が表門に当たる。舗方役所の東に床屋と焼窯があり上の床屋をわずかに示している。
6. 歓喜間符、歓東間符以外では、大和間符、床屋、自在、天満、中天満、歓治、釘口、代々の坑口が描かれている。
7. 喧嘩谷から大阪屋敷に向かう山道は杖立路と表記されている。立川・東平から土山越えをして土佐の杖立に至る道に出る。
8. 現在、蘭塔場と呼んでいる小山は元禄7年の別子大火の後に観音堂が設けられたので古観音堂と表記されている。
9. 観音堂は後の足谷小学校、別子病院、自彊舎が設置される箇所にある。
10. 山神宮が縁起の端に鎮座している。山神宮の西斜面と寛政谷の斜面に焼窯が並んでいる。木垣が2ヶ所あり、木材が積まれている。
11. 焼窯の下段に床屋役所があり、床と蔵と炭蔵が並んでいる。炭が下流から運ばれてくるので南側が表門となっている。ここは下の床屋である。
12. 勘庭と吹所には柵が設置されている。
13. 吹所の柵内に稲荷社がある。
14. 勘庭の階段の北に医家がある。勘庭の下に制札場があり、その北に百合夜庵があるが、座敷の離れになるのか。勘庭の上に御輿蔵がある。
15. 了簡谷、喧嘩谷、土持谷、風呂屋谷と谷名が記載されている。
16. 現在の見花谷、両見谷は、元の喧嘩谷、了簡谷と表記されている。
17. 風呂屋谷には風呂屋がある。風呂屋たにから西山への山道がある。
18. 喧嘩谷と了簡谷の間の上に火^{しん}滲家がある。火が滲みる家で、火葬場か。
19. 勘庭から下がった所と板小屋(現在の圓通寺出張所跡)の2箇所^{しん}に地蔵堂がある。
20. 現在の圓通寺出張所跡の地蔵堂周辺は広範囲に墓地となっている。雑誌「遠鳴」の美田秀蔵の話では土木事務所・小学校は墓地であった。絵図は劇場跡や小学校跡まで示している。明治になって開発された裏門から南が描かれているのが特徴である。

5. 別子御銅山絵図の貼紙を読む

高橋	此所高橋之上に 水強行横岩に ^{はなはだ} 乍多し
吹所の下	此所影釜之谷 石目岩ニ乍多し 天満之谷が下に行落
下木垣	此所天満の下之谷 落合わたした水 出しに谷岩ニ乍多し
天満・中天満の下	此所大切と天満 落合谷岩に乍 多し
観音堂の下	此所歎東間符か 歎喜間符下谷 水強行落

6. おわりに

絵図の原本を見ることができないので、製本の絵図を拡大コピーして虫眼鏡片手で読む。幸いにも「別子御銅山絵図」については、別子銅山記念館でパネル展示しているので文字が更に大きく見える。製本の絵図では見つけられなかった文字も見つけた。また、そのパネルの展示絵図を虫眼鏡で更に拡大して見ると字形が判明する。江戸時代の旧別子の絵図情報を4枚重ねて見ると明治の写真の100年前を更に100年遡り200年前の足谷の様子が分かる。江戸時代の別子銅山の生産・生活空間は裏門から上流の谷間である。露頭線が谷間の上部を走り、坑道から搬出された鉱石が下されて焼窯で焼かれ、焼鉱が吹所に下され製錬される。吹所も鉛吹炉と真吹炉で製錬手順が東から西への導線が分かる。重力に従って上から下への動線による生産都市の構造となっている。江戸時代の区域の周辺部の東延、高橋、小足谷が明治時代になって開発されることとなる。大まかに言うと、足谷川の左岸が生産区域で、右岸が生活区域となっている。機能区域で区分された都市構造でもある。旧別子の小縮尺の現地測量ができるとより鮮明に分かってくる。

裏門から足谷川右岸を制札場に向かう主要道路跡は、現在かすかに残っているが足を踏み入っていない。この大通り下には広い建物跡が連続して続いている。両見谷川と見花谷川の間にある見花谷川が分岐した川は、明治32年の別子大水害で出来たので、江戸期の絵図には無い。現在の登山道は、谷が下刻作用で掘られたためかなりの高巻となっていて、江戸後期の吹所・炭蔵跡の柵の内は見ないで巡っている。そこで昨年下の床屋の上を喧嘩谷まで新しい道を開いた。対岸の吹所跡には黒いカラムがわずかに残っている。縁起の端の上の床屋が江戸初期の吹所で、大切坑前のズリに銅分が赤く残っているので技術進歩も山中を踏査して判明した。